令和３年度　特別選抜コース

第２回　入学試験問題　（２月３日　午後）

Ｓ特選チャレンジ

国　語　（50分）

注　意

１　この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
２　問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
３　答えはすべて解答用紙に記入すること。
４　**字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「　」（　）などの記号を含んだ字数として解答すること。**
５　印刷がわからない場合は申し出ること。
６　試験終了の合図でやめること。

東京都市大学等々力中学校

受験番号		氏名	

一

次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

1、昔日の記憶がよみがえる。
2、若干名の募集。
3、約束を律義に守る。
4、真紅のバラの花束をもらう。
5、夕日に映える。
6、イサギヨく非を認める。
7、花のつぼみが赤みをオびる。
8、オウチャクして失敗する。
9、ケビョウを使って欠席した。
10、役所のスイトウ係。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学一年生の「ぼく」（太二）はテニス部に所属している。朝練で荒れたコートを昼休み中に均すのは一年生の役目になっており、グーパージャんけんの一発勝負で人数の少ない側になった者が四面あるコートの整備にあたらなくてはならない。この日のじゃんけんでは、武藤の指示でハメられた末永が一人で整備にあたった。「ぼく」は、小学一年生からの友達であり超がつくほどまじめな久保が、とめる側にまわらず武藤についたこともショックだった。

父の麻婆豆腐でお腹はいっぱいになったものの、グーパージャんけんを終わらせるアイディアは浮かばなかった。テニス部の連絡網はわたされていたので、いっそのこと中田さんに話してしまおうと、ぼくは携帯電話を開いた。

しかし、キャプテンに直談判して当番制に変えてもらったとしても、それなら誰がチクったのだろうと、一年生部員のあいだに不信感が生ま

れてしまう。やはり自分たちで解決するしかないと覚悟を決めて携帯電話を閉じたが、どうすればいいのかはわからなかった。

神様、雨を降らせて、明日の朝練を中止にしてください。寝る前に三度も祈ったのに、目覚まし時計に起こされて雨戸を開けると、空はよく晴れていた。一階では母が朝ご飯のしたくをしていて、父は母が帰ってくる前に仕事に行ったという。

「学校でなにかあったの？　おとうさんがメールをくれて、太二のことを心配していたから、おかあさんはやびけしてきたのよ」

夜勤のときは午前八時で交替だったと思い出し、ぼくは母にあやまった。

「心配させてごめん。でも、なんでもないんだ。おかあさんは、きょうは休み？」

「夜勤明けだから、あさっての朝まで家にいるわよ」

「そうなんだ」

と答えながら、今日の晩ご飯のときには両親がそろっているのだと思うと、やるだけのことはやってやろうと気合いが入った。母がつくってくれたベーコンエッグと納豆の朝ご飯を食べて、ぼくはラケットを背負い、かけ足で学校に向かった。

朝練では、一年生対二年生の対抗戦をする。シングルマッチで一ゲームを取ったほうの勝ち。四面のコートに分かれて、合計二十四試合をして、白星の多い学年はそのままコートで練習をつづける。負けた学年は球拾いと声出しにまわる。

力試しにはもってこいだが、二年生との実力差は大きくて、これまで一年生が勝ち越したことは一度もなかった。武藤と末永は勝率五割をキープしていたが、ぼくは三回に一度勝てるかどうか。ただし、粘りに粘って中田さんから金星をあげたことがある。誰が相手であれ、①きのうからのもやもやを一掃するためにも、今日はどうしても二年生に勝ちたかった。

ところが、やる気とは裏腹に、ぼくは一ポイントも取れずに負けてしまった。別のコートで戦う武藤や末永もサーブがまるで決まらず、ダブル(注)フォールトを連発して自滅。久保も、ほかの一年生たちも、A も B も出ないまま二年生に打ち負かされて、これまでにない早さで勝負がついた。

「どうした一年。だらしがねえぞ」

キャプテンの中田さんに命じられて、ぼくたちは朝からグラウンドを走らされた。いつも先頭を切っているので、みんなの姿を見ずに走るのは慣れていたが、今日だけは武藤や末永や久保がどんな顔でついて来ているのか、気になってしかたがなかった。

誰もが、きのう末永をハメたことを後悔しているのだ。足を止めて、一年生全員で話し合いをして、昼休みのコート整備を当番制に変えてもらうようにキャプテンに頼もうと言いたかったが、ぼくは思い切れないままグラウンドを走りつづけた。

「よし、ラスト一周。ダッシュでまわってこい」

中田さんの声を合図に全力疾走となり、ぼくは先頭を守ったまま、テニスコートの前まで走りきった。

「ボールは片付けておいたからな。昼休みのコート整備はちゃんとやれよ」

八時二十分を過ぎていたので、ネットの向こうは登校する生徒たちでいっぱいだった。武藤に、［　I　］と一声かけておきたかったが、息が切れて、とても口をきくどころではなかった。

ラケットを持って一年三組の教室へと階段をのぼりながら、ぼくは武藤と話さなくてよかったと思った。ぼくが武藤を呼びとめていたら、ほかの一年生はぼくたちがなにを話しているのかと、気になってしかたがなかったはずだ。武藤ではなく、久保か末永を呼びとめていても同じ不安が広がったにちがいない。冷静に考えれば、きのうのことは一度きりの悪だくみとして終わらせるしかないわけだが、疑いだせばきりがないのも事実だった。

もしかすると、みんなは今日も末永をハメようとしていて、自分だけがそれを知らされていないのかもしれない。もしかすると、きのうの仕返しに、末永がなにかしかけようとしているのかもしれない。もしかすると、二、三人の仲の良い者どうしで申し合せて、たとえ負けてもひとりにはならないように安全策をこうじているのかもしれない。

きのうの夜には考えつかなかった可能性がつぎつぎ頭に浮かび、これは思っている以上に厄介（やっかい）だと、ぼくは頭を悩ませた。

やはり中田さんに打ち明けるしかない。そう思ったが、それを思いとどまったのは、きのうから今日にかけて、一番きつい思いをしているのは末永だと気づいたからだ。末永以外の一年生部員二十三人は、自分が加担した悪だくみのツケとして［　C　］におちいっているにすぎない。それに対して末永は、今日もまたハメられるかもしれないという恐れをかかえながら朝練に出てきたにちがいない。最終的に中田さんに頼むとしても、まずはみんなで末永にあやまり、そのうえで相談するのが筋だろう。

そう結論したのは、三時間目の終わりだった。おかげで社会の授業はまるで耳に入らなかったが、ようやく②自分のするべきことに納得がいき、トイレに行こうと廊下に出ると武藤がこっちに歩いてくる。ただし、顔をうつむかせて、ぼくには気づいていなかった。

「よお」

「おっ、おお」

武藤はおどろき、気弱げな笑顔を浮かべた。そんな武藤は見たことがなかったので、休み時間に顧問の浅井先生から注意を受けたのではないかとぼくは思った。

浅井先生は、末永がいる一年一組のクラス担任だった。末永が、たぶん武藤が中心になって自分をハメたと思うと訴えて、先生は武藤に事実確認を求めたのだ。それなら、昼休みにテニスコートに集まったところで、浅井先生から話があるだろう。たっぷり怒られるにちがいないが、それでケリがつくならかまわなかった。

四時間目の授業が終わり、ぼくはテニスコートに向かった。しかし、集まったのは一年生だけで、浅井先生の姿はなかった。ぼくは落胆（らくたん）するの

と同時に自分の甘さに腹が立った。

いつものように二十四人で輪をつくったが、誰の顔も緊張で青ざめていた。末永にいたっては、歯をくいしばりすぎて、こめかみとあごが

D 動いている。ヘアーバンドが斜めになっているのも気づかないほどで、ぼくは今更ながら、末永に悪いことをしたと反省した。

しかし、こんな状況で口を開き、きのうはハメて悪かったと末永にあやまったら、どんな展開になるかわからない。武藤をはじめとするみんなからは、よけいなことを言いやがってと恨まれて、末永だって怒りのやり場に困るだろう。

だから、一番いいのは、このまま普通にグーパーじゃんけんをすることだった。うまく分かれてくれればいいが、偶然、グーかパーがひとりになる可能性だってある。ハメるつもりがないのに、末永がまたひとりになってしまったら、事態はこじれて収拾がつかなくなる。

みんなは青ざめた顔のまま、じゃんけんに移ろうとしていた。どうか、グーとパーが均等に分かれてほしい。

こぶしを顔の横に持ってきたとき、ぼくの頭に父の姿が浮かんだ。一緒にテニススクールに通っていたころ、父は試合で会心のショットを決めると、応援しているぼくたちに向かってポーズをとった。ぼくや母も、同じポーズで父にこたえた。

「グーパー、じゃん」

掛け声に合わせて手を振りおろしたぼくはチョキを出していた。本当はVサインのつもりだったが、この状況ではどうしたってチョキにしか見えない。ぼく以外はパーが十五人でグーが八人。末永はパーで、武藤と久保はグーを出していた。

ぼくが顔をあげると、向かいにいた久保と目が合った。

「太二、わかったよ。おれもチョキにするわ」

久保はそう言ってグーからチョキにかえると、尖らせた口から息を吐いた。

「なあ、武藤。グーパーはもうやめよう」

久保に言われて、③武藤はくちびるを隠すように口を結び、何度も小さく頷いた。そして、武藤は握っていたこぶしから人差し指と中指を伸ばすと、ぼくに向かってその手を突き出した。

武藤からのVサインを受けて、ぼくは末永にVサインを送った。末永は自分の手のひらを見つめながらパーをチョキに変えて、輪の中に差し出した。

「明日からのコート整備をどうするかは、放課後の練習のあとで決めよう。時間もないし、今日はチョキがブラシをかけるよ」

そう言って、ぼくが道具小屋に向かってかけだすと、何人かの足音がつづいた。ブラシを取ったところで振り返ると、久保と武藤と末永のあとにも四人がかけてきて、ぼくは八本あるブラシを一本ずつ手わたした。

コート整備をするあいだ、誰も口をきかなかった。ぼくの横には久保がいて、ブラシとブラシが離れないように歩幅を合わせて歩いていると、

きのうからのわだかまりが消えていく気がした。

隣のコートでは武藤と末永が並び、百八十センチ近い長身の二人は大股でブラシを引いていく。コートの端までくると、内側の武藤が歩幅を狭くしてきれいな弧を描き、直線にもどれば二人ともがまた大股になってブラシを引いていく。

④きっと、ぼくたちはこれまでよりもずっと強くなるだろう。個人戦はもちろん、ダブルスでも、そしてチーム全体としても、とても強くなれるはずだ。

（佐川　光晴「四本のラケット」より）

（注）「ダブルフォールト」……サーブを二回続けて失敗すること。失点となる。

問　一、――線①「きのうからのもやもや」とありますが、ここでは「ぼく」のどのような状態を言っていますか。「末永の件は、」に続くように、文章中の言葉を使って、四十字以内で答えなさい。

末永の件は、［　四十字以内　］

問　二、［A］・［B］にあてはまる漢字一字を答え、慣用表現を完成させなさい。

問　三、［　I　］にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、今日はどうするの？
イ、間違っても今日はやるなよ
ウ、昨日はごめんね
エ、昨日はなぜあんなことしたの？

問　四、［C］にあてはまる言葉を文章中から二字で探し、抜き出して答えなさい。

問五、――線②「自分のするべきこと」とはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、末永のことは、一度きりの過ちとして済ませるようみんなに伝えること。
イ、今日も末永をハメようと考えているかもしれない一年生部員を止めること。
ウ、きつい思いをしている末永の心を理解してもらうよう、中田さんに頼むこと。
エ、一年生部員全員で末永にあやまった後、キャプテンに相談すること。

問六、［D］にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、ぶるぶる　　イ、ゆっくり　　ウ、しっかり　　エ、ぴくぴく

問七、――線③「武藤はくちびるを隠すように口を結び、何度も小さく頷いた」とありますが、このときの武藤の心情を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から六字で探し、抜き出して答えなさい。

自分が中心となり末永を計略にかけてしまったことに対しとても［　六字　］。

問八、――線④「きっと、ぼくたちはこれまでよりもずっと強くなるだろう」と「ぼく」が思ったのはなぜですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、失敗をしたとしても、やり直す機会を与え合えるような関係を築くことができたから。
イ、過ちを犯したとしても、自然と許し合えるような関係を築くことができたから。
ウ、言葉を交わさなくても、互いの心が通じ合えるような関係を築くことができたから。
エ、行動を起こさなくても、互いの考えを理解し合えるような関係を築くことができたから。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本で一九九〇～九二年に放映された第二のアニメシリーズ「楽しいムーミン一家」と「楽しいムーミン一家・冒険日記」（「平成ムーミン」）は、翌年以降、フィンランドや北欧諸国はもちろん、世界じゅうの国や地域で公開された。フィンランドでは週に二度、テレビ画面にムーミンがあらわれた。一度はフィンランド語で、もう一度はスウェーデン語で。①アニメーションの魅力は動きと色彩である。挿絵が示唆的（注1）であるとすれば、②アニメーションはより叙述的である。嵐の海でボートと格闘するパパの姿も、夏至祭のイヴにニョロニョロが生えでるようすも、大量のセル画をくりだすアニメーションなら一目瞭然ではない。

A　児童文学やコミックスのムーミンに親しんできたフィンランドやスウェーデンでも、このアニメが与えた衝撃は大きかった。放映と同時に、ムーミン・ルネサンスとでもいうべき現象が生じた。フィンランドの銀行が景品にムーミン貯金箱を作ると、B　品切れになった。フィンランドの陶器会社アラビアでは以前からムーミンを作っていたが、アニメ放映による人気再燃をうけて、マグカップからミルクピッチャー、イヤープレートや時計まで、ムーミンものは定番となった。郵便局では　1　的にあたらしいムーミン切手が売りだされ、あらゆる種類のムーミングッズが巷にあふれている。C　確立していたムーミン人気にあらたな勢いを注入したのは、まぎれもなく第二のアニメシリーズ「平成ムーミン」であった。

「平成ムーミン」がフィンランドに上陸した直後、フィンランド人の文芸評論家スヴィ・アホラは、自身のムーミン体験と自分の子どもたちのムーミン体験の差にショックをうけた、と書いた（「ふたつの海」『月刊ＭＯＥ』一九九四年六月号への寄稿記事）。一九六〇年代に子ども時代をすごしたアホラにとって、本の挿絵もテレビもコミックスもほとんどがモノクローム（注2）だった。だから、「ムーミンの物語を読むと、水浴びや釣りをした子どものころの日々が思いだされ、あの灰色のなめらかな岩が眼に浮かんでくる」という。ところが、「わたしの子どもたちは、まず、テレビアニメでムーミン体験をした。青と白の波が立ち、黄金の魚が泳ぐ海。これがなによりのお気に入りだが、わたしにはどうしても日本の版画にある海としか思えない」。

アホラの幼い子どもたちは、日本人の多くの子どもたちとおなじく、読み書きができるようになる前にアニメのムーミンに出会った。その後、すこし大きくなると、ムーミンの本を読みきかせようとした彼女を驚かせた。ムーミンの挿絵をのぞきこんで、子どもたちはこういったのだ。「どうして白黒なの？　テレビだとカラーなのに」。　2　的には同じムーミンであっても、あきらかに媒体（注3）によって体験のしかたがちがう。最初は少々がっかりしたアホラだが、つぎのように記事をしめくくった。「ひとつはしずかなモノクロームの海、もうひとつはあざやかな色彩と陰影の海。このふたつの海は、③世界がどれほど変わったかを示している。また、わたしたちがそれぞれ自分たちの流儀で、どれほどムーミンを愛しているかということも」。

ムーミンア受容のかたちは、まさに人さまざま、時代や地域によっても異なる。最初にどの媒体をつうじてムーミンに出会うかで、一定の方向づけが与えられる。とはいえ、そこからさらに歩を進める人も多い。イ児童文学からコミックスへ、テレビアニメから児童文学へ、あるいはコミックスからテレビアニメへ。アホラがいうように、それぞれの流儀でムーミンとかかわればよいのだろう。

数多くの油絵、フレスコ画、挿絵、諷刺画[注4]などをべつとしても、ヤンソン[注5]の仕事は多岐にわたる。全二一話のムーミンコミックス（一九五四～五九）、九冊の児童文学のムーミンシリーズ（一九四五～七〇）、二冊のヤングアダルトの小説『ウ彫刻家の娘』（一九六八）と『エ少女ソフィアの夏』（一九七二）、そしてポストムーミンのおとなむけの小説や短篇集が一〇冊（一九七一～九八）である。

「ポスト」という表現の妥当性はさておき、おとなむけの小説作品はすべて［3］的にはムーミンシリーズのあとに書かれている。ヤンソンは一九五八年に父ヴィクトルを亡くし、一九七〇年には母シグネを亡くした。ムーミンパパとムーミンママを失ったムーミン谷は、ヤンソンの心のなかで急速に色あせて遠ざかっていった。もう子ども時代には戻れない。ポストムーミンはヤンソンが長かった子ども時代に別れを告げ、あまりに強烈な存在であった両親から真に自立するために書いた作品群だといってもよい。

日本では、④ポストムーミン作品もほぼすべて日本語で読むことができる。これもまたヨーロッパ諸国から注目される所以である。それだけでなく、ムーミンコミックスはもとより、青年層を対象とするいわゆるヤングアダルト本にもすべて邦訳[注6]がある。フィンランドとスウェーデン以外で、ここまでほぼ完璧に翻訳がそろっている国は例がない。わりあい言語系統が似ていて翻訳がされやすい英仏独などの言語でも、ヤングアダルトとポストムーミンを合わせてそれぞれ数冊が訳されているにすぎない。しかもヨーロッパでは、一般に本が流通する期間はおそろしく短い。うかうかしていると新刊本でもすぐに入手できなくなる。

そのうえ、普及版のペーパーバック[注7]ではなく、美装版のハードカバーだと、おそろしく値段も高い。フィンランドやスウェーデンのような人口の多くない国ではなおさらである。だから立派な装丁でかざられた書籍は、贈る相手が子どもであるとおとなであるとを問わず、クリスマス・ギフトの定番なのだ。したがって出版社側もこのギフト本の購入時期をめがけて、つまり十月から十一月末にかけて主力書籍を投入する。その後、初版のまま品切れになる作品も少なくない。売れゆきがどうかはともかく、現在、フィンランドでもスウェーデンでもポストムーミン作品は全巻そろわない。

「ムーミン」は日欧ではちがうヴェクトル[注8]で受容の道をたどった。日本では、児童文学がまず読者を得て、ついでふたつのテレビアニメシリーズの放映がファン層を拡大した。世界でも類をみないその人気は、ポストムーミン作品にまでおよんでいる。かたやヨーロッパでは、まずは新聞の連載漫画でおとなの読者の心をつかみ、コミックス人気が飛び火したかのように児童文学にも愛読者が生まれた。日本にもけっしておとなのファンは少なくないが、ヨーロッパにはその日本以上におとなのムーミンファンが多いのは、こうした経緯と関係があるのかもしれない。

受容の様態によって、ムーミンは異なる「顔」をみせる。日本での「顔」が［4］的なのか、ヨーロッパでの「顔」が付随(ふずい)的なのか、あるいはまたその逆と考えるべきなのかを問うても、ほとんど意味がない。どちらもれっきとしたムーミンの「顔」である。対象となる読者や視聴者、表現手段としての媒体、受容の形態や歴史、これらすべてにおける両義性こそが、⑤ムーミンの尽きせぬ魅力の泉なのだろう。

（冨原 眞弓「ムーミンのふたつの顔」より）

（注1）「示唆的」……それとなく知らせること。ほのめかすこと。
（注2）「モノクローム」……一色で描画・印刷・表示等された図画のこと。映像分野などでは白黒と同義。
（注3）「媒体」……情報伝達のなかだちとなるもの。情報を受け取る手段。
（注4）「諷刺画」……社会や人物の欠点・罪悪を遠回しに批判した絵。
（注5）「ヤンソン」……トーベ・ヤンソン。「ムーミン」の作者。
（注6）「邦訳」……外国語で書かれた文章を日本語に訳したもの。
（注7）「ペーパーバック」……文庫本や新書の類。
（注8）「ヴェクトル」……物事の向かう方向と勢い。方向性。

問　一、この文章中には、本来肯定表現であるべき部分が否定表現になっているところが一か所あります。それを文章中から八字で探し、抜き出して答えなさい。

問　二、――線①「アニメーションの魅力」が起こしたものは何ですか。文章中から十字で探し、抜き出して答えなさい。

問　三、――線②「アニメーション」の対照として示されているものは何ですか。文章中から四字で探し、抜き出して答えなさい。

問四、A〜Cにあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、A―きっと　B―たちまち　C―やはり
イ、A―やはり　B―すぐに　C―きっと
ウ、A―ずっと　B―すぐに　C―もっと
エ、A―ながらく　B―たちまち　C―すでに

問五、1〜4にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、1―時期　2―現実　3―定期　4―根源
イ、1―基本　2―現実　3―根源　4―一面
ウ、1―現実　2―時期　3―基本　4―理論
エ、1―周期　2―基本　3―時期　4―根源

問六、――線③「世界がどれほど変わったかを示している」とありますが、この文章では「世界」はどのように「変わった」と言っていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、アホラの時代の人々は、成長してからアニメでムーミンを体験したので、ムーミン世界のイメージはカラフルではなかったが、幼い頃にアニメのムーミンを体験したアホラの子どもたちにとってのムーミン世界はカラフルなものになったということ。

イ、読み書きができるようになってからアニメのムーミンに出会ったアホラ達は、鮮やかな色彩の海を持つムーミン世界を想像するが、ムーミンの絵本の読み聞かせで育ったアホラの子どもたちは、モノクロームの海を持つムーミン世界を想像するようになったということ。

ウ、児童文学やコミックスのムーミンに親しんできたフィンランドやスウェーデンの人々は、アニメでムーミンを体験することにより、青と白の波が立つ海よりも、灰色のなめらかな岩のある海に親しみを感じるようになったということ。

エ、アホラの子どもたちが育ったのはテレビアニメという媒体に限定された時代であり、児童文学書やコミックスという媒体を用いて、親が子どもたちに読み聞かせをすることなどは行われない時代へと変化していったということ。

問七、═══線ア～エのうち熟語の構成が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問八、――線④「ポストムーミン作品」について、次の各問いに答えなさい。

1、「ポストムーミン作品」とは具体的に何ですか。文章中の言葉を使って二十字以内で答えなさい。

2、「ポストムーミン作品」が生まれた理由は何ですか。文章中から十字程度で探し、抜き出して答えなさい。

問九、――線⑤「ムーミンの尽きせぬ魅力」とありますが、その説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、新聞の連載漫画でも、テレビのアニメーションでもファンを数多く獲得したということ。

イ、ヨーロッパにおいても、日本と同様におとなのムーミンファンを数多く獲得したということ。

ウ、出発点が児童文学であっても、新聞の連載漫画であっても、多くのファンを獲得したということ。

エ、対象とする読者が、おとなであっても、子どもであっても、多くのファンを獲得したということ。

四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私の祖父は明治の人だった。幼いころ言われた。「きみが本当に正しいと思うなら、叫ばなくていい。なるべく小さい声で話しなさい」。なぜか最近よく思い出す。

いまの世が威勢のいい、[A]声にあふれているからだろうか。攻撃的なつぶやき、罵(ののし)りあい、みなが言葉を強く発する時代。「小さい声」などだれも聞かない、ダメなものに思える。亡き祖父は何を考えていたのか。

東京大学教授の阿部公彦(まさひこ)さん（52）の著書を読んでいて、気になる文章をみつけた。「負けたり、弱かったり、だめだったりする。そんな言葉が社会の中で[B]意味を持つこともある」とあった。

阿部さんを訪ね、祖父の言葉について聞いてみた。唐突な問いにもかかわらず、英文学者は教えてくれた。「英語では大事なことを言うときに、あえて強調ではなく、『ｐｅｒｈａｐｓ（もしかすると）』と①表現をぼかすことがある。小さい声もそうではないですか」

大切なことは強い断定調では逆に伝わりにくくなる。愛をささやくとき、親しい人を失ったとき、簡単に言えない何かを伝えるとき、私たちは[B]弱く、あいまいに言葉を使ってきた、と阿部さんは言うのだ。

「②心の底に／強い圧力をかけて／蔵(しま)ってある言葉／声に出せば／文字に記せば／たちまちに色褪(あ)せるだろう」（茨木のり子(注)「言いたくない言葉」）。やっと口にする、消え入りそうな声だからこそ、相手に届く何かがある。もしかすると、祖父はそう言いたかったのかもしれない。

（朝日新聞「天声人語」より）

（注）「茨木のり子」……詩人、エッセイスト。「自分の感受性くらい」「わたしが一番きれいだったとき」など代表作多数。

問　一、[A]にあてはまる言葉を三字程度で考えて答えなさい。

問　二、[B]にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、さらに　　イ、もちろん　　ウ、とりわけ　　エ、また　　オ、むしろ

問三、――線①「表現をぼかす」とは、どのようにすることですか。「～すること。」に続くように文章中から一語で探し、抜き出して答えなさい。

問四、――線②「心の底に　強い圧力をかけて／蔵ってある言葉」とありますが、これはどのようなものですか。文章中から九字で探し、抜き出して答えなさい。

問五、この文章の主旨として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、正しいことを言うときには、小さい声で発言すれば、相手も耳をすまして聞くことになるということ。
イ、正しいことを言うときには、声の小さい人のほうが、相手も気をつかって話に耳を傾けるということ。
ウ、心の底からしぼりだす言葉は、控えめに伝えるほうが、相手にも嫌な感情を持たれないということ。
エ、心の底からしぼりだす言葉は、たとえ小さい声でも相手の心の奥底におのずから伝わるということ。

令和３年度　特別選抜コース（Ｓ特選チャレンジ）

第２回　中学校入学試験問題〔国語〕解答用紙　（２月３日午後）

評点	チェック

〈受験生はこれより上段には記入しないこと〉

一				
5	4	3	2	1
10	9	8	7	6

二				
四	三	二		一
		B	A	
八	七	六		五

三				
五	四	三	二	一
九	八		七	六
	2	1		

四		
三	二	一
	五	四

受験番号
氏　名

一

1	昔日	6	イサギヨ（く）く
2	若干	7	オ（びる）びる
3	律義	8	オウチャク
4	真紅	9	ケビョウ
5	映（える）える	10	スイトウ

二

問一　末永の件は、

問二　A　B

問三

問四

問五

問六

問七

問八

30　10

40　20

三

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

2　1

10　10

20

問九

四

問一

問二

問三　すること。

問四

問五